

II. 開会・趣旨説明

筑波大学大学院 唐木 清志



おはようございます。筑波大学の唐木です。第4回を迎えまして、学校教育と土木がこういった会を通して、どんどんつながっていけばいいなということを痛感しています。

趣旨説明ということで、ここにいらっしゃる方はほとんどが土木関係の方だと思いますので、学校教育のほうから、今日のメインのテーマになります「専門家とつながる」ということについてお話をしてみようと思います。

私は土木と付き合っただけまだ5年くらいです。そんなに専門的ではないです。ただ、学校教育のほうは長らく20年以上やっていますので、そちらのほうは比較的分かります。今までいろいろな専門家の方と付き合ってきました。事例を上げながら、今日のテーマに至ったところをお話させていただこうと思います。

私が今まで研究テーマとしてきたものに、例えば福祉というのがあります。筑波大学に赴任する前、私は静岡大学というところに勤めておりました、そのときにずいぶんと福祉の仕事をしました。そこで専門家とつながることについていろいろ考えたことをお話ししてみようと思います。

静岡で車いすで生活する方と一緒に小学生と静岡バスに乗って、町の中を探検してみようという活動をしました。具体的には、夏休みの自由研究で3日ぐらい、小学生を30名ほど集めて、車いすで生活をされる方5人ぐらいに協力を願って、一緒にバスに乗ってみようという活動をしました。それがおそらく土木、交通といったところに私が関わるようになる最初のきっかけになります。

本日は3つお話をします。1つ、静岡に焼津というところがあります。そこで車椅子で生活をされる方と一緒に仕事をしたことがあります。私の中では、この車椅子で生活をされる方も専門家の一人です。ある小学校で総合的な学習の時間を使って、車椅子で生活をしている人に車椅子をプレゼントしようという活動を展開しました。大きな箱にその当時、もう15年ぐらい前ですか、プルタブをいっぱい集めると車いすに交換できるという制度があって、子どもたちは半年ぐらいかけて一生懸命プルタブを集めたんです。集められたプルタブを車椅子に交換して、半年付き合ってくれた車椅子の生活の方にプレゼントしました。その車椅子の生活をされる方はとても喜んで受け入れてくださったんです。

その後、その車椅子の方とちょっとお話をし、シンポジウムをしたら、良いこと言うなと思って私は聞きました。その方がどういうことを言ったかという、車椅子で生活される方、あるいは福祉に関わっている人はよく分かると思うけれども、既製品の車いすを渡されても正直役には立たないと言いました。つまり、車椅子というのは、障害の程度に応じていろいろなかたちがあります。例えば比較的手が自由に動く方、あるいは重さもあります。50キロの人と100キロの人の車いすでは形状も異なります。「実は、子どもたちが一生懸命集めてくれて、プレゼントしてくれたんだけど、私はそれには乗ることができない」と言っていました。

また、焼津というところは海がすぐそこにあります。子どもが送ってくれた、半年かけて集めたプルタブで交換された車椅子は鉄製だったんです。焼津で生活するその方は、これではさびてしまうから、皆さん見てみれば分かるとおりにアルミのものを使っているんだと言っていました。でも、子どもたちにはそんなことは言えないから僕はもらったけど、もらったこれはずっと使うことはないだろうと言っていました。

小学校の先生が子どもたちに活動を始める前に、その車椅子の方ともっとじっくりと話していれば、そんなことにはならなかったのになというお話です。専門家とつながるといことがとても大事だという一つの事例になるのかなと思います。

2つ目、焼津の隣に藤枝というところがあります。その社会福祉協議会の方とも一緒に仕事をしたことがあります。今度は中学校の総合的な学習の時間です。子どもたちはやはり老人福祉施設に車椅子を送ろうと思って、今度は1年かけて一生懸命アルミ缶を集めて車椅子に交換する活動を展開しました。最終的には、車いすを老人福祉施設にプレゼントしたわけです。

皆さんよく社会福祉協議会が出しているようなパンフレット、冊子に「中学生がわれわれ老人福祉施設に車椅子をプレゼント」みたいなものを見たことがあるんじゃないかと思います。

私の中では、老人福祉施設の方は重要な専門家です。やはり同じようにマスコミの方がいらっちゃって、写真を撮って、市報とかに載せてくれました。とてもうれしそうな顔です。子どもたちも満足です。これもまた社会福祉施設の方に後で聞いたら、「先生、倉庫の中には、子どもたちから送られた車椅子がいっぱいなんです」と言っていました。

その施設の方は続けて何ておっしゃっていたかという、私たち福祉施設、そしてお年寄りが今一番欲しいのは、車いすではなくて園芸クラブで使う草や野菜の種だったり、ショベルだったり、あるいはカラオケクラブで使う新しい歌のDVDだったりなんだけれども、子どもたちは、学校の先生はどうしてそうも車いすを贈りたがるんだろうと言っていました。これも学習が始まる前に、きちっと福祉施設の方と話を進めていけば、もっと有効な支援の仕方というのがあったんじゃないかなと思います。

学校の先生はとても熱心です。子どもたちも熱心に活動を展開してくれます。福祉、ボランティアの名の下にいろいろな学習をして、いろいろなことを学んでいるんです。でも、事前に、あるいは学習の途中で専門家としっかりとつながっていないと、それぞれの学習というものが意味を成さなくなります。ぜひ学習の前後で、あるいは途中でつながるといこと

を大切にしてほしいと思う。これがこのフォーラムで「専門家とつながる」ということに達した一つの理由かと思います。

ただ、一つこんな話もあります。また車椅子ですけど、焼津、藤枝、隣に掛川というところがあります。この掛川のところでも福祉の仕事をしたことがあるんですけど、今度はこの社会福祉協議会の人にこういう話をされました。先日、ある中学校の先生が、車いすを貸してくれと言ったと、車いすに子どもを乗せて体験学習させたいんだと言って、車いすを貸してくれと言ったんだそうです。

実は、社会福祉協議会の方はよく分かっています。子どもたちは、小学校、中学校と、多い子で3回も4回も車椅子に乗る活動をするんです。それを分かっているから、社会福祉協議会の方はこう聞きました。「どういう目的のために、つまりどういう教育目標のために、どのような活動を、どの教科、領域の中でやるんですか」と聞いたんです。それは私が入れ知恵したんです。ぜひそのように聞いてくれと。そうしたら、その学校の先生はこう言ったそうです。「もう結構です。借りなくても結構です。ほかの学習をします。ほかのところに借りに行きます」と。

先ほどの藤枝と焼津の例は、事前にもっと、もっと専門家とつながっていればいい学習ができたというお話でした。でも、学校の先生の中には、体験重視で、あるいは活動だけ展開すればいいということで専門家とつながることを避けようとする人も中にはいます。でも、僕はそのときに言いましたけれども、「どんどん、どんどん学校の先生にそう言ってやることも、先生方にとってみるととてもいい勉強なんだから、言い続けてください」と言いました。学校の先生もさまざまです。意欲のある方もいれば、そうでない方も正直おられます。でも、専門家とつながることでいい学習活動が展開されることは間違いのないことです。

私は今福祉の話しかしていませんが、土木にも当然専門家がいます。専門家の幅はとても広いんだろうと思います。どういうふうにつながったらいいのかとか、どんな学習活動が展開されるのか、一緒に専門家の方々と協議しながら授業をつくる重要性みたいなことを一日考えていただければいいかと思います。

事例ばかりで趣旨が上手に伝えられたかどうか不安ですけども、ぜひ一日皆さんで勉強していただければいいなと思います。以上です。よろしくお願いします。